

日本の「心の哲学」に未来はあるのか？

著者	柴田 正良
著者別表示	Shibata Masayoshi
雑誌名	2014年科学基礎論学会 60周年記念分野別ワークショップ 『日本の心の哲学のこれまでとこれから』 発表資料
ページ	1p. 15p.
発行年	2014-06-15
URL	http://hdl.handle.net/2297/43253



日本の心の哲学に未来はあるか？

柴田正良

金沢大学理事（教育担当副学長）

日本の「心の哲学」に未来はあるのか？ 本発表は、「たぶん、あまり元気のいい未来はない」という占いを示すのが目的である。

これまでの日本の「心の哲学」を振り返ると、そこに「心の哲学」をメイン・テーマとするだけの基本動機と背景がなかったことが分かる。それは、輸入哲学をこととする日本の哲学において、輸入の失敗を意味する。当時、輸入元であった英米系の哲学は、ウィトゲンシュタイン、ライル、カルナップ、クワイン、セラーズらの言語哲学が主流であり、それゆえ、言語による虚構としての〈心〉といったものが、おおむね日本の「心の哲学」の基調であった。かつて大森荘蔵、坂本百大、黒田亘、吉田夏彦といった世代の哲学者にとって、「心の哲学」はメイン・テーマではなかった。およそ彼らにとって、心的現象はリアルな問題領域ではなく、各自の哲学的主張（例えば、「立ち現れ一元論」）の応用問題にすぎなかった。つまり、わずかな例外を除き、心身問題そのものすらも、自立した探求領域とはならなかったのである。問題は、それ以後も、英米系の「心の哲学」の本来の切実な動機を真に共有することがなかった点である。したがって、日本の「心の哲学」は輸入にすら失敗した。

その結果、哲学的直観と常識を唯一のガイドとして進むことになった。さらに将来、それは、関連科学との有機的な連携を欠いたまま、「知的ゲーム」（蝸壺）としての「心の哲学」となり果てるであろう。

ところで、輸入元であった英米系の「心の哲学」の基本動機とは何だったのだろうか。心的因果の問題から、簡単に論争の動機を眺めてみよう。出発点を1950年代の還元的物理主義（性質一元論）に取ると、それが、1960年代以降、2つの方向から批判に晒されてくるのが見える。第一はパトナムに代表される機能主義からの批判であり、もう一つは、デイヴィドソンの非法則的一元論からの批判である。これらの批判の要点は、性質一元論に代えて、性質の二元論もしくは多元論を許容することによって、基礎科学と個別科学相互の自律的・整合的關係、および基礎科学と〈心と行為〉相互の自律的・整合的關係を確保しようとするものであった。しかし、詳しくは述べないが、現在、これら2つの形態の非還元的物理主義はいずれも、心的性質の因果的不活性という帰結のゆえに、再びキムの唱える還元的物理主義によって論難されている。

重要な点は、これらの動きが、コンピュータ・サイエンスや人工知能研究、認知科学や理論的言語学の爆発的進展に対する反応を動機としていることである。一言で言えば、哲学に求められたのは、これらの科学と整合的な説明関係に立つ「心の機能主義的モデル」を構築すること、および機能主義を支える存在論的な基盤（非還元的物理主義）を提供することであった。そしてもちろん、これに対する更なる反動は、機能に還元困難な心的現象、クオリアや意識からやってきた。チャルマーズやジャクソン

らの反物理主義が英米系の「心の哲学」を動かすもう一つの要因である。

さて問題は、日本の哲学者にはそのような切実な動機が存在しない、ということである。日本の哲学とそうした科学は、不幸なことに、ほとんど接点をもたない。つまり哲学と科学との間に今も生産的な関係はほとんどない。例えば日本の「心の哲学」は、フォーダーの「思考の言語」や、チャーチランドの「心のコネクショニズム」のような、科学者を「走らせる」説明モデルを提出したためしがない。したがって、日本の「心の哲学」は、今もせいぜい、自分の哲学的直観と常識だけを議論の指針としているにすぎない。あとはいつもの如く、自分の好みに合う輸入哲学者の翻訳をするか、その代弁者となるだけだ。

そのような状況は、心的因果を巡る美濃・柏端・柴田の論争からも確認できる。この論争は、1994年の科学哲学会(北大)におけるWSから始まり、幾多の論文の応酬とシンポ等でのやり取りを挟み、2009年の応用哲学会(京都大)でのWSを越えて、現在も続いている。これは、日本の哲学者同士が論争を回避し、相互に黙殺する傾向にあることからすれば、一定の評価に値しよう。しかし、残念ながら、世界的に通用するような成果は何も生み出していない。

この論争の構造は、日本の「心の哲学」に典型的なものだ。(1) 心的性質に因果的効力があるはずだ、という特別な宗教的、科学的確信などは誰ももっていない。(2) 美濃は常識的直観に従い、柏端は形而上学的直観に、柴田は非還元主義的直観に従った。(3) おおよそ、美濃は J. キムの代弁者となり、柏端は D. ルイス(?), 柴田は D. デイビッドソンの代弁者となった。(4) 科学がこれに影響を与えることもなく、逆もまた然り。ちなみに、この構造は、服部裕幸、戸田山和久を加えた、コネクショニズムに関する論争でもほぼ同じである(あるいは、信原幸弘が参加した他の幾つかの論争でも)。

一体、何がダメなのか? まず、哲学的直観や常識だけで論争を続けるのは非生産的である。さらに、哲学史の知識はおおむね役に立たず、輸入テーマや輸入テクニックは、動機と背景を真に共有していない限り、単なる流行病である。そして一番重要なことに、哲学(関係者)に閉じた議論は、自己満足以外、他の領域にほぼ何ももたらさない。

この典型的な袋小路から脱出する道はあるのだろうか? 以下に、それを思いつくまに述べてみよう。まず、状況として、日本の「心の哲学」の基本的立場は、還元的だろうと非還元的だろうと、現実世界が少なくとも「自然的 supervenience」の成立する可能世界だという物理主義的前提を崩せないだろう。したがって、これを前提に、(a) 「心の哲学」を科学の関連領域との連携で展開すべきである。脳神経科学、認知科学、ロボット工学などとの積極的な問題交流を行う。場合によって、現象的意識とクオリアの問題は、特殊な領域だけに閉じた議論にしかならないかもしれない。(b) 物理主義がもたらす倫理的問題圏の動揺に対処し、物理主義的倫理学を構築する。(c) 議論のテーマと手法を輸入物で賄うのではなく日本ブランドで育て、英語論文を一般化し、国際標準のレベルに上げる(あるいは英訳されるだけの論文を書く)。

そのためには、若手の人材育成が必須だが、従来の哲学系大学院教育はほとんど役に立たない。したがって、幾つかの対策が必要だが、それは本発表時に譲る。